

広島文教大学附属高等学校だより【保護者の皆様へ】12

2025 年 12 月 4 日

校長 岡 利道

部活動 点描 ～ダンス部～

満を持して、元気いっぱいのダンス部さんを取り上げましょう。もともとダンス好きな生徒たちです。部員がだんだん増えてきて、練習にもずいぶん活気が出てきています。

現在の部員は8名です。顧問は、井上泰先生と、本校卒業生でもある井上神奈コーチです。井上神奈コーチには、週2回ですが、経験を生かした、いい指導をしていただいています。

ここでは、やはり盛り上がった9月の文教祭のステージを紹介します。10曲ぐらい、チーム編成を変え、多彩なパフォーマンスを披露しました。



ダンス部のモットーは、「やる気・本気・元気」です。部員たちは、どんなエンジョイ&トライをしているのでしょうか？

学校ホームページの部活紹介でも書かれていますが、ヒップホップやK-popダンスをコピーしたり、自分たちでアレンジしたりしています。最終的には、様々な大会への出場を目標としています。夢をかなえるのは、間近でしょう。

コーチの先生には、アイソレーションなどのダンスの基礎・基本を徹底して教わってきたそうです。アイソレーションは、「愛想」よくすることではなく（オヤジギャグ!?）、「分離、独立」といった意味の言葉だそうです。ダンスにおいては、ある箇所だけを動かすこと、つまり決まった部位を動かすことを、意図的・計画的にトレーニングすることと言えます。その部位としては、首、腰、肩、胸などで、反復練習することにより、どんどん見栄えもよくなっていくのでしょうか。なるほど！ だから、ダンス部の皆さんがカッコよく見えるわ

けです。

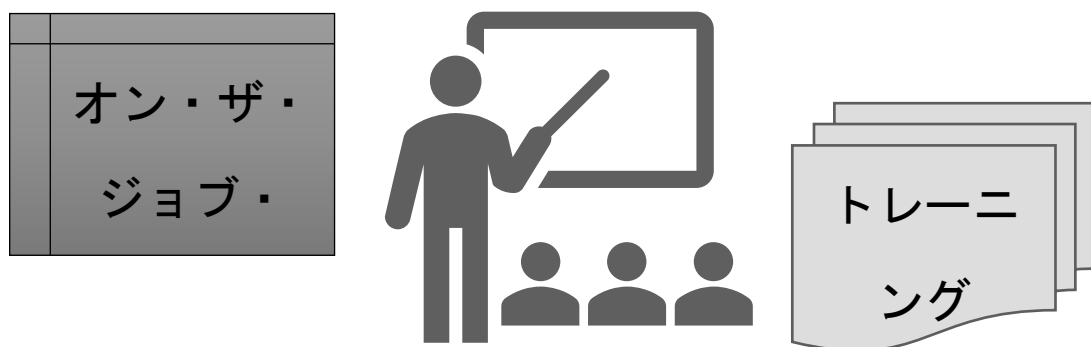
井上泰先生からは、「部内の雰囲気もどんどんよくなっています。今はそれでもいいのですが、これからは対外的な場に出るのが増えそうだから、他校のダンス部の演技もどんどん観たり、広島文教大学のダンス部とも交流したりして、力を高めてほしいですね。」と期待が寄せられています。

部員が声を大にして言います。「私たちを応援してくださるたくさんの方々への感謝の気持ちを忘れず、大きく成長できるよう頑張っていきます。応援よろしくお願いします！」と。私も及ばずながら、出演する機会があれば、足を運びます。皆様、よろしくお願いいたします。

本校の先生方の取組 ～授業力を向上させるために～

本校の先生たちは、授業力を向上させるために、例えば2学期ですと、約1か月をかけ、お互いの授業を見合って切磋琢磨する取組をしています。生徒一人ひとりの学習効果を高められるように授業の質を向上させ、教科の壁を超えて、教員同士が互いに切磋琢磨する風土を醸成することが目指されています。

シンプルに解説しましょう。A先生がB先生の授業を観察したとします。B先生は、授業観察後、そこでの気づきを「良かった点」を中心に、全員で共有できるように、「観察授業シート」（高校内の共有フォルダーを使用）の「授業観察のコメント」シートに入力します。一人ひとりの先生の授業技術で光るところを見つけ、皆で共有化していくわけです。A先生は、全日程が終わったところで、寄せられた全てのコメントを読み、個人の振り返りを同様に入力します。このように、オン・ザ・ジョブ・トレーニングとしてのやりとりがなされているのです。是非とも続けていきたいと思います。



★ここからは視点を変えて……

これからの教育界の動向を見てみましょう。一つの動きとして、先生たちがファシリテーターの役割を果たすことが期待されています。教えるティーチャ

ーやインストラクターとは異なり、ファシリテーターには、「促進者」及び「支援者」という意味があります。

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）」（令和３年１月２６日中央教育審議会）にも、「教師に求められる資質・能力は、これまでの答申等においても繰り返し提言されてきたところであり、例えば、使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力、ファシリテーション能力などが挙げられている。」とあります。この「ファシリテーション能力」は、ファシリテーターとしての能力に他なりません。

支援者としては、例えば、雰囲気づくりに配慮していくことがポイントの一つとなります。具体的には、次のような例が挙げられます。

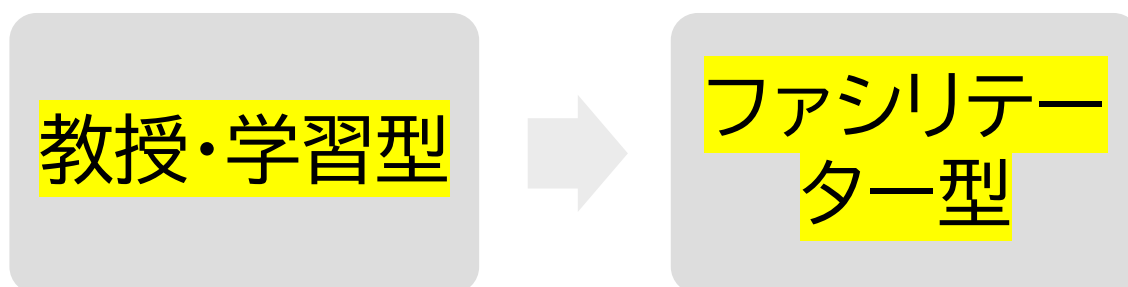
＜雰囲気づくりのポイントの例＞

- ☐ 笑顔や明るい声かけ
- ☐ 適切な言葉遣い
- ☐ 自由な発言機会の保障
- ☐ 受容的・共感的な態度
- ☐ 学習者とファシリテーターの対等な関係

これらを見ていただきますと、従来の授業とはずいぶん違ったイメージを持たれるのではないのでしょうか。まさにアットホームな雰囲気で、生徒としても心をオープンにして、考えを言いやすくなるわけです。

高校の数学の授業をする場合に即して考えてみます。伝統的な「教授・学習型授業」とは別な、教員がファシリテーターの役割で授業をしたら、と考えてみます。指導過程はどうなるのでしょうか？

「教授・学習型」から「ファシリテーター型」への転換は、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を重視する現代的な授業づくりに直結します。高校数学で教員がファシリテーターになる場合、指導過程は次のような流れが考えられます。あくまでも一例です。



1. 導入（課題提示）

目的 生徒に「なぜこの学びが必要か」を理解させ、興味を引く。

方法 実生活や他教科と関連する問いを提示する。
（例：「スマホの画面比率はなぜ黄金比に近い？」）。
ゴールの明確化。（例：「今日の目標は“二次関数の性質を使って最適化問題を解こう、です。」）

2. 探究活動（個人・グループ）

教員の役割 説明ではなく「問いかけ」「支援」。

方法 生徒に問題解決のプロセスを任せる。
必要に応じてヒントを出す（例：「グラフの形に注目するとどうなるだろうか？」）。
ICT や教具を活用し、試行錯誤を促す。

3. 対話・共有

目的 考え方の多様性を認識し、深い理解へ向かわせる。

方法 グループごとに解法を発表。
他グループの考え方を比較・質問。
教員は「正解の提示」ではなく「考え方の整理・一般化」を促す。

4. まとめ・振り返り

目的 学びを構造化し、次につなげる。

方法 生徒に「今日の学びを一言でまとめる」活動を促す。
教員は「数学的な本質」を抽出し、次回の課題を示す。
このとき、今日の授業目標に即して考えていくようにする。

全体的にポイントになることは…

教員は「知識の伝達者」ではなく「学びのデザイナー」。
生徒の主体性を引き出すため、「問いの質と対話の場づくり」が鍵。
評価も「結果」だけでなく「過程」を重視（ルーブリックや自己評価を活用）。

もちろん、毎時間がこうなるわけではありません。必要に応じて、また授業の目的に応じて、取り入れられるとよいでしょう。日本の教育現場では、こういったスタイルの授業が徐々に増えていくはずで、本校でも、少しずつ広が

って言ってほしいと願います。生徒が活動に打ち込んで、自身が気付いたり発見したりし、その気付きや発見を自分の中で深め、他の生徒に広める中で、知識はより定着するでしょう。

生徒の意見や考えを引き出したり、広げたりすること、意見を整理したりまとめたりすることが大事になるでしょう。

